

吉田徳次郎先生の御逝去にあたり各方面より寄せられた追悼の言葉を、ここに一括して掲載させて頂き、亡き先生をおおびいたしたいと存じます。なお文章はすべて原文のままでありますことを御断わりいたします。

【編集部】

吉田徳次郎博士の思い出

平山復二郎

東大同窓の吉田徳次郎君（感じが出ないので敬語は一切使わないことにした）が、亡くなった。この4,5年、同窓が相ついで、他界するので、なんとも寂しいが、もう、みんな70歳をこしているのだから、諦めるほかない。といっても、技術界にとっては大きな損失である。

吉田君をはじめて知ったのは、府立第一中学校の1年同級生としてであった。しかし2年生の時、お父さんの転任で金沢へ転校したので、そのまま疎遠になってしまった。

ところが、明治42年（1909年）に、東大工学部土木科に入学したら、新入生中に吉田君がいた。6年ぶりの再会だったが、話してみると、吉田君の家（現在の住所）と私の家とが、3,4分の近くなのである。こんな関係でその後吉田君とは、単に同窓というだけでなく、家族的にも親しく、つきあうなかになった。何かわからない問題でもありと、よくお互い出かけていって、菓子をつまみながら、勝手な議論をしあったものである。吉田君と学生時代の昔話になると、よくこの頃のことが出たが、7年前、私の母の一周忌にも、吉田君がこの時代の思い出を語って、亡母を偲んでくれた。

学窓を出ると、私は同窓9人と一緒に鉄道院に就職したが、吉田君は、創立間もない九大の土木教室に就職した。吉田君のお父さんは、鉄道院につとめていたのだから、吉田君も当然鉄道院に就職してよいはずだったが、先生から特に見込まれたのである。

同窓29人、それぞれ特徴のある面白い連中だったが、非常に仲よく、まとまりもよかった。徴兵検査には6人合格で、吉田君も私もその1人だった。吉田君は赤羽の工兵隊に、私は中野の電信隊に、一年志願兵として入隊した。

卒業も問のない頃、だれの発案だったか「エンドレス・レター」をやらうじゃないかという議がまとまった。卒業後は散り散りばらばらになるので、帳面にめいめいが便りを書いては、それを順々に廻し、エンドレスに通信をつづけようというのである。これは結局6,7年つ

づいて、いつとなくエンドとなってしまったが、終戦後その一冊が一同窓の手もとから見つかった。昔なつかしいものなので、昭和27年に出版した私の随筆集に、これを載せておいたが、そのなかに、吉田君の便りもある。大正4年（1915年）の日付だが、その一部をぬいてみると

「……（前略）……入営して間もなく、日独戦争が初まり、第1大隊の一部が出征したので、随分種々な仕事につかわれた。10月に除隊にならないかと思ったら、無事に除隊になった。戦の御蔭で動員なるものを見た。年老いた父母が、その子に別れを告げため、赤毛布と重箱と酒徳利を持ってきた事や、涙を吞んで「死んで帰れ、男らしくやれ」と云って居た声は、まだ耳目にあたらしい。その光景は瞑目して想像して載くよりしかたない。僕の筆などの及ぶ所でない。……（中略）……2学期で三角測量と「リーストスケッチャー」を終えて、3学期から1週4時間、測地をやって居ります。学校の時試験がなかったので、何も勉強しなかったで、匡却一通りならず。只々Jordanをまるかじりと云う有様です。それで其の日其の日に逐われて居ります……（後略）……」

この吉田君の便りは、割合長いものだが、若い時代の吉田君をしのぶ、よすがになる。

吉田君は職務がら、福岡に落付いたが、私は反対に、あちこちを転々とした。私の方からは、九州に出かける機会さえあれば、万障をくりあわして、吉田君の家に立寄ったが、吉田君も暑中休暇などに、必ずといってよい位、私の転任先を訪ねてくれた。私の任地で吉田君の泊らなかつた土地は、一つもない。満洲にまで訪ねてくれた。私が結婚したのは、千葉県房総東線、房州北条付近の建設現場主任をしていた時だが、吉田君は私より1,2ヶ月おくれた。この時も、吉田君は新婚旅行かたがた、房州まで泊りにきてくれた。

こんなわけで、吉田君には私生活でも、ずいぶん厄介になったが、公的生活では、それ以上に世話になった。というのは、私の関係した諸工事で、コンクリートに関する問題は、その大小にかかわらず、万事吉田君にもちこんで、その指導をうけたからである。吉田君は、忙しいのに、いやな顔一つせず心よく相談ののってくれた。

吉田君の指導やアドバイスは、学者にありがちな、こういうこともある、ああいうこともある式の単なる知識の紹介ではなく、問題の本質や条件をつかんで「こうだから、こうだ、こうすべきだ」「こうだから、こういう調べをやらなければいけない」「調べをやって、こうだったら、こうだ、こうすべきだ」といった式の技術的に筋の通った明快な親切なものだった。だから教えをうける者にとっては、ほんとに頼りになった。知識と一緒に知恵がもらえたのである。

これが、吉田君の実にえらなかった点だが、全く常人の真似のできない勉強努力の結果であったと思っている。実際、吉田君は、立派な工学者として理論家であると同時に、立派な技術者として実際家でもあった。かえすがえすも、その死が惜しまれてならない。

(同期生 葬儀委員長 元土木学会会長)

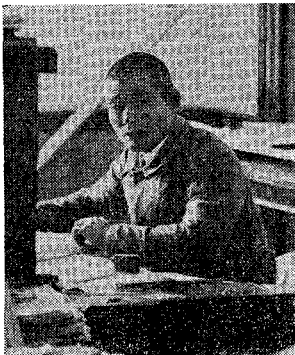
吉田徳次郎先生の壮年時代

松尾春雄

吉田先生が後年東京で花々しく活動される以前に、静かにその根を齎っておられたのが、九州大学在任中であるといつてよいように思う。東大を卒業されるとすぐに、講師として九大に赴任され、その後助教授及び教授として26年間に在任されたわけであるが、わたしたちが学生として教えを受けた大正11・2年頃は、米国及び欧州の留学から帰られて間のない時で、最も張り切っておられた時であるように思う。精力的な早口の講義をされた後は、すぐに実験室に入ってスコップを持ってコンクリートの手練りを手伝ったり、十数キロもあるテスト・ピースをかついだり、時には砂利のかごを天秤棒でかついで運ぶような事までして、骨身を惜まず実験に打込んでおられた。こうして自ら先頭に立って実験されるだけでなく、下に働く人の意見などもよく容れて、その人たちも一緒に実験するのだという、積極的な協力意欲を起させるような使い方をされていたようである。

その頃はまだ日本ではコンクリートの研究が何処でも殆んど行われていなかったのだから、先生はパイオニアとしての喜びと苦しみとを味いながら、学生時代に柔道部主将までしてきたえられる体力と智力とをすべてこれに注ぎ込んでおられた。理論より実験というのが、先生の信念であった。自分の専門以外の事は何も目に入らず、完全にそれに沈潜出来たこの時代は、先生の最も幸福な

34 オころの吉田先生
(九大教官室にて)



(松尾春雄氏所蔵)

時代であったかもしれない。

一方、努力家である先生は学問の事は何でもこなせるという信念を持っておられたようで、ある時「僕は大学の講義なら何でもやれる自信があるよ」といつておられた。事実先生は九大の助教授時代

にはコンクリートの他に構造力学、道路、測量、土木施工法などの講義を担当された事がある。そして先生の最初の著書が「土圧及び擁壁設計法」であつて12版を重ねる程広く読まれた事も先生のキャパシティーの大きい事を示していると思う。

私達のクラスでは、先生はTurner and MauerのPrinciples of Reinforced Concrete Constructionをテキストに使っておられたので、早口の講義をノートする悩みから解放されて、愉快に講義を聞く事が出来た。その頃は大学の講義はすべてノートする時代であつたが、先生によって原書をよむ訓練をつける事が出来てよかつたと思う。堅練りコンクリートが強いから水は出来るだけ少く使うようにと耳にたこが出来る位聞かされたが、これはわたしたちが社会に出て働くようになって、工事監督をする時に、一つの信念になっていた。

大学を卒業する時、先生はわれわれに「諸君は大学を出たら、外国語の専門雑誌を必ず購読し給え。そしてこれを保存しないで捨てる勇氣を持たなければいけない。あとで読もうと積んでおくようなことをしないで。そんな事をしたってあとからでは読めるものではない。金を払って買ったものとなると、むざむざ捨てられなくて、少しは目を通すものだ。この少しがつもりつもって何年かの後には大きな知識になるのだ」といつて教えて下さつた。わたしは、その言葉に従つてEngineering News Recordを購読したが、毎週一回米国から直送して来るのを、先生の教えのようになつて努力したけれども、本職の仕事が忙がしいのを口実にして、やがてつん読する様になつてしまつた。あれを先生の言葉通り続けているか、少くともこれをスクラップして整理していたら、今頃はもっと専門知識を身につけていたであらうにと、先生に申訳なく思つている。

昨年10月東京での九大卒業生の会合の席上、何年ぶりかで元氣の御姿に接し、先生の隣に座つて親しく御話を伺うことが出来た。その時先生は立つて挨拶された中で、「自分も段々年を取つて、老境を感ぜずにはなつたが、残る生涯も出来るだけ世の中のお役に立つようになつたい」といつた意味のお話があつた。その時何となくわたしには寂しく感ぜられたが、思えばこれが先生とお会い出来た最後になつた。そしてこの中の最後の言葉は我々に対する遺訓でもある様に思う。

先生の大学への出勤が早いことは有名であるが、九大では林桂一先生が早朝、一番の市内電車で出勤されておつた。この林先生の影響で吉田先生も早く出られるようになった様である。スイスの有名な思想家のヒルティ教授も、そのベルン大学の主な講義は、夏には朝7時に冬には8時に正確に始つたという事であり、この教授が75回目の誕生日を迎えた時、門下生がその祝辞をさしあげるに最も都合のよい時間を教授に問合せてた処、「朝

7時前が一番都合がよい」と答えたという有名な話があるが、吉田先生とどこか通じるものがあるように思う。そのヒルティ教授の著書「幸福論」の中のエピクテトスの項の終りにのべてある、次の言葉は吉田先生にぴったりあてはまるように思う。

偉大な人々の生涯はわれらに教える、
われらもまた高貴に生き得る事を。
そしてこの世を去るときは
時劫の砂に足跡を残すことを。
おそらく、他の
貧しく、よるべなき兄弟が
人生の荒海を渡るとき眼にためて、
新たな勇気をおぼえるような足跡を。

(九州大学教授、工学部土木工学科)

吉田先生の思い出

飯田房太郎

終戦後羽田飛行場建設の折、埋立の地盤改良の工事が米軍八〇八部隊で施工された当時、同部隊長から、日本の権威ある土木の学者の御意見もお聞きして参考にしたい、という申し入れがあった。早速私は吉田先生に御足労願って、羽田の現場を調査し、米軍に意見具申していただいた。その頃から御永眠される迄の約十五年間、私は私の関係した工事の殆ど全部について、いつも先生の御力をお借りして、無事に施工の万全を期することが出来たのであった。

平常随分御多忙の先生であったが、御視察を御願いますと、喜んで出張していただけたので、先生のお供をして現場を歩き廻った回数からいうと、私は飛び切り多い方で、それだけに、先生との旅の思い出が、私のアルバムには一杯つまって温存されている(写真参照)。

黒部第四ダムにて



先生は現場に行かれると徹底的にこまかい処まで御覧になられるので、昼間の強行軍で、夕方は相当疲れられる。夕方事務所につくと、現場の幹部連や先生に教えを戴いた若手連中が待ちかまえているので、皆の希望と一緒に食事ということになると、先生も非常にお喜びになって、大抵賑やかな夕食で疲れを忘れて戴くことが多かった。処が斯様な席になると、必ず先生が「飯田君、隣りへ座り給え」と云はれる。私も喜んで先生の隣りに座って、盛んにメートルをあげたものだった。先生が何故私を隣りに座らせたかと云う理由が、後で次第に判ってきた。先生は、私がビールを三杯飲む間に、一杯召し上げるのを定量として居られた。即ち私は先生の召し上げるビールの計量器の役目をしている訳であった。そこで、「先生、お流れを一杯下さい」とやると「君は三杯飲んで返し給え」と云はれ、三杯飲まねば返盃を受取って下さらない。「献酬だけは先生一対一で願います」と申すと、「配合の原則を破る訳には行かない」と申され、最後まで断然一対三の原則を破って戴けなかった。

現場の思い出として、私にとって一番愉快だったのは、大井川の上流の中部電力株式会社の井川ダム建設時代のことである。

このダムは御承知の様に、日本で最初のホローグラビティダムであっただけに、中部電力の方々も、この設計及び計画に当っては、非常な御注意を払われたが、吾々の方も亦、施工上の欠陥のために事故でもあってはと、初めての試みに対して相当苦勞もし研究もした。中部電力の方々も、随分多方面の御意見を総合された様で、勿論その中心であられた吉田先生も、このダムには興味を持たれた。設計上にも先生が興味を持たれたを幸に、施工側の吾々も、施工計画その他には、全面的に吉田先生に御指導を受け慎重に進められた。何回となく、非常に不便な大井川の奥、井川村に御足労願っては、数々の教えを戴いて、工事は順調に進捗し、仮設も掘削も漸く大過なく終了して、混凝土打設にまで漕ぎつけた。

須田貝ダムにて



吉田先生のお人柄

国分正胤

混凝土打初めの頃の或る日、先生のお供をして現場の混凝土施工のブロックの上に登り、先生を中心に、係の者の説明を聞き先生に色々質問をしている時、スルスルと上のクレーンからバケツが降りて来た。笛の合図でこのバケツの口が開いて一勢に混凝土が足許に落ちて来た。一瞬私はハッとした。それが何と、どう見ても良い混凝土とはいえない、「これはいかん」と直感した。私もこれは事務所へ帰って、皆とよく打合せねばいかんなどと思いつつ居ったが、その時の自分の動作には格別意識せずに居ったのだった。

さてその夕方、事務所に引きあげて幹部一同集合し、先生の御話しを伺い、これからの方針につき打合せをした。その席上、四方山の話の打、笑を浮べて先生曰く、「今日は堰堤の混凝土打設について、現場をよく見せて戴きました。飯田君が予想以上に真剣に混凝土に留意しているので安心した。諸君、バケツから混凝土が出た時、飯田君が僕の傍からスーッと消えてなくなる時の混凝土は、よくないと思って、直ぐに手当をするべきだ」と……。一同この吉田先生の一声に思わず大笑いに終わって夕食になった。

この井川堰堤も、先生の御指導により立派に出来上り日本最初のホローダムとしての偉容を建て、更に吾々は前進して、その奥の同じく中部電力の畑薙第一、第二ダムと取り組んだのである。この両ダムも、その計画から段取り一切を、重ねて先生の御力を拝借して、極めて順調に進捗し、両ダムとも目下混凝土打設中である。

然し、今はもう先生は居られない。もう如何なる場面に逢うとも、先生に御聞きする訳にはいかない。

私は先生御物故の後一週間程してから、現場に出張し一人で、嘗ての現場を歩いた後、幹部を集めて打合せの席上、先づ一同瞑目して、先生の御霊安らげくと祈ったが、その時、何とも云い知れない淋しさが私の胸を去来した。職員一同も亦、先生に対し無限の愛惜の情に胸をうたれ、感無量の面持であった。

(KK間組取締役 営業部長)

九州電力塚原ダムで(昭和12年ごろ)



吉田徳次郎先生のお人柄を簡単に表現すれば、努力に努力を重ねられた正しく、親切なお方、と申せましょう。「エンジニアリングには飛躍は少い。一步一步の着実な努力の集積だけが進歩を生む源である」と述べられ、また「実験を軽んじたり怠ったりしては、進歩は期待できない」と強調され、イリノイ大学で大学院学生としてタルボット先生に師事して居られた頃の御体験を語られるのが常でした。以下御遺稿の中から抜萃してみます。

タルボット先生が講義に使用しておられた紙を私に渡されて「この紙で袋を造り中に砂を入れて短柱としたら何程の荷重に耐えるか」という宿題を出されました。日本で実験をやったことのない私は、与えられた紙の引張強さが知れば、ランキンの土圧論で砂の横方向圧力を計算できると考えたのであります。それで図書館に行って紙の引張強さについてしらべたのであります。しかし、もちろん、与えられた紙の引張強さを書いた本はありません。やむをえず次の講義の時間に「計算できない」と答えました。そうしたら、先生から「なぜ砂入り紙袋に荷重をかけて試験をしないのか」と叱られました。日本の大学の助教授はこれ位の智恵も無いのかと思われたことは誠に残念でした。実にひどい失敗をしました。しかし、これによって「わからない事は実験してみる」ということを会得しました。これは私が今日私の宝としていどころであります。

今一つ、今日までの私の経験で貴いと思っていることは、「むずかしい問題も倦まずやっけて居れば何んとかなる」換言すれば「窮すれば通ずる」というところであります。私は「窮すれば通ずる」ということを信じ、「わからないことはやってみる」ということで各種の問題を処して居ります。

先生が大学に早朝から御登学になり孜孜として研究を続けられて居られた事は周知の事ですが、特に、定年で御退官になられる前の二年間は、日曜日はもちろん元旦までも出勤され、私は年始の御挨拶を大学で申し上げました。この理由について「学校へ来る方が楽しいから」と簡単に申されたのですが、研究に没頭すべき学徒の道を身を以て示されるためのものと後で知り、顔から火が出る思いを致しました。この様に、先生は常に身を以て後輩を導かれたのであります。

先生は、誰に対しても憚ること無く、終始真理を主張されましたが、余りにも高潔高邁であられた為に理解されぬ場合もあり、ガンコオヤヂの尊称を奉つられても居られました。しかし、このガンコオヤヂの響きの中には父親に対する様な親愛感が流れていたと思います。立派な工事を完成する為、また相手の身を思えばこそその親心から発する御主張で、叱られた相手でも却って親近感を覚えたのでありましょう。先生は、どんな種類の人にも差別を設けず親切に応待されるお方でした。お忙しい中の質問にも全智を傾けて返答され、納得するまで説明

を繰り返され、エンジニアはあく迄も技術を尊重せねばならぬと諭されるのでした。

工事現場に於ける先生のお姿、金鍬とタオルを腰に下げ、脚絆を巻き、ステッキを突かれて上空を睥睨されたお姿に、英雄をしのばせる犯し難い威厳を認められた方は数多いと存じます。しかし、実験室に於ける先生のお姿は、崇高な美しさに包まれておられました。昭和 21 年の秋「今日は僕が実験して見せてあげる」と申されて舗装用コンクリートの配合を先生が定められた事がありました。拝見していて、真剣勝負しながらの気迫に打たれると共に寸分の無駄も無い、流れる様に円滑な美しい御動作に息づまる様な感激を覚え、眼頭が熱くなり、時の経つのを全く忘れた午後でした。古今に残る舞台の名優の演技とも思われ、美に溢れた名人芸に感じ入ったのであります。先生を包むこの美しさが、庶民的な、くだけた御性格とよく調和して、接する人に一層の親愛感を抱かせたものと信じます。

驚く程に多くの人達から敬慕されて居られた偉大な吉田徳次郎先生が逝去あそばされました！ 私共には余りにも大きな悲しみである為に、悲しむよりも、ただ呆然として、お亡くなりになられた事が実感となりません。実感とならないのは、先生が身を以てお示しになられた数々の御教訓を、何時迄も失いたくないと念じているからと存じます。先生の御身体は消えても、先生の御遺志はコンクリートの在る限り、多くの門下生に受け継がれて生かされるものと堅信し、先生の御冥福を切に切に御祈り申し上げます。
(東京大学教授 工学部土木工学科)

吉田徳次郎先生の思い出

仁 杉 巖

吉田先生は国鉄の技術研究所に嘱託として、昭和 15 年頃から 10 年余り、毎週半日づつ来ておられた。私は昭和 18 年から 24 年まで、研究所にいたので、その間ずっと先生の御指導をうけたのである。そして、コンクリートの大家から個人教授をうけるので、大いに感激して、勉強した。しかし、週に一度づつ来られるたびに、新しい問題をお尋ねするとか、前週に「よく調べてごらんさい」といわれた宿題に返事するとかいうことは大へんな努力が必要であって、当時研究所におられた沼田先生(現土木学会長)、内山先生(現中央大学教授)の方々と共に頭をかかえ込んでしまうことも度々あった。この頃吉田先生は毎週月曜の朝 8 時半には必ず研究所のコンクリート研究室に來られて、復員して間もなくコンクリートを全く知らない私の幼稚な愚問に対して、丁寧に子供にきとすように教えて下さった。当時先生に関して

世間で厳しい方という評判があったが、私にはそんな感じはなく、父親のような親しさを感じていた。先生は毎週來られるので、お尋ねする問題もないままに、先生と色々雑談をしながら、数多くの教訓を教えていただいた。そして、その間に、私は先生の学問に対するひたむきな情熱と高い人格に感嘆し、また、技術者としての心がまえについて色々教えていただくことができた。先生の私に教えられた言葉は数多くあるが、その 2、3 について紙面のゆるす限り記してみよう。

その頃私はよく技術屋と事務屋さんとの間の待遇の差ということについて、先生に不満をぶちまけたのであるが、その時先生は「技術者は技術をもって社会に奉仕しているものである。勿論技術者の中にも所謂頭梁として経営に参加するものもあり、私(先生御自身のこと)のようにコンクリートという面だけの狭い技術にたずさわっているものもあるが、しかも、技術者は技術にたずさわっていることを忘れてはならない。世の技術者の多くが学校を出るとすぐ事務屋のまねばかりしたがって、技術の勉強にはげまないものが多い。こうした状態では技術者自身が技術を軽蔑しているのであって、自分達が軽蔑している技術者を他の事務屋さんで尊敬するはずがないではないか。これからは技術が段々と世の中で重視されるようになると思うが、今の技術者のあり方では心もとなない。君達若い技術者はまづ一生懸命勉強して、世の中から重視されるような技術者になることが先決で、そうなれば、自然と技術者の待遇も改善されるであろう」と言われていた。先生のこのお言葉で私は自分の不明をしみじみと感じた。

また、先生は文献を非常に大事にされた方であった。よく私に「日本人は文献を大事にしないから技術が進歩しないのだ。私が他人に文献をかすとほとんどいってもよい位に返してこない。これは自分が文献を大事にしないから、他人の文献を尊重しないのだ。しかし、技術の基本は先ず知識の集積から初まるのだから、文献を大切にし、かつ、文献を整理しておかなければならない。整理されていない文献は持っていないことと同じだ」と教えられた。

このほかにも先生に親しく接することができた私には多くの心にのこっているお言葉があり、そのいずれもが輝くような貴重な教訓であって、先生に教えていただいた幸福を深く感謝している。

先生が日本のコンクリート技術の発展に偉大な功績をのこされたのも、学問に対する激しい熱情、多方面にわたった深い思索と、そして、自らを律することの厳格なこと等がその基をなしており、それなるが故に日本の多くの土木技術者から吉田徳次郎先生として尊敬を一身にあつめられ、また、海外にも広くその名が知られていたのであろうと思う。
(国鉄名古屋幹線工務局長)